令和８年（2026年）度　学長奨励賞

	所属	職名	氏名	研究分野
1	医学部附属病院	助教	木下　智文	整形外科学
2	沿岸環境科学研究センター	准教授	田上　瑠美	環境科学・環境分析化学
3	法文学部	准教授	藤村　瞳	ビルマ（ミャンマー）史、東南アジア地域研究

＊氏名 50音順

令和８年度　学長奨励賞

所属／氏名／職名	医学部附属病院　整形外科　木下 智文　助教
研究分野	整形外科学

このたびは、令和 8 年度愛媛大学学長奨励賞という栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。このような賞をいただけたことを大変光栄に思うとともに、これまで私の臨床・研究活動を支えてくださった多くの皆様に深く感謝申し上げます。

私はこれまで整形外科医として膝関節の診療に携わるとともに、人工膝関節置換術のさらなる治療成績向上を目指して研究を続けてきました。特に、Navigation system を用いた膝関節運動の解析や、愛媛大学の Cadaver Surgical Training（CST）施設を活用した献体膝での研究を通じて、患者さん一人ひとりにより適した人工膝関節手術の実現を目指してきました。

献体膝を用いた研究は、愛媛大学白菊会を通じてご献体いただいた方々の尊いご意思なくして実施することはできません。医学・医療の発展のためにご献体くださった方々、そしてそのご意思を尊重し支えてくださったご家族の皆様に、心より深い感謝と敬意を申し上げます。ご献体から得られた貴重な知見を、より良い医療として患者さんへ還元していくことが、研究に携わる私たちの大切な責務であると考えています。

これらの研究は、決して一人で成し遂げられたものではありません。日々ともに診療・研究に取り組んでいる同僚の先生方、研究に協力してくださった皆様、そして愛媛大学、愛媛大学医学部附属病院、整形外科学教室の皆様から、多大なるご指導とご支援をいただきました。今回の受賞も、多くの方々に支えていただきながら積み重ねてきた研究成果を評価していただいたものと受け止めています。

また、2025 年 4 月から 2026 年 3 月までデンマークのコペンハーゲン大学に留学し、海外の研究者とともに臨床研究に取り組む機会をいただきました。帰国後も共同研究を継続しており、愛媛大学で培ってきた研究を国際的な共同研究へ発展させる貴重なつながりとなっています。

今回の受賞を励みとして、これからも愛媛大学の特色ある研究環境を生かし、国内外の研究者との連携を深めながら、愛媛から日本、そして世界の医療に貢献できる研究成果を発信していきたいと考えています。同時に、そこで得られた新たな知見や技術を愛媛大学医学部附属病院での実際の治療へと還元し、患者さんにより良い医療を届けることにつなげていきたいと思います。今回の受賞への感謝を忘れず、今後も研究と臨床の双方に真摯に取り組み、さらなる研鑽を重ねてまいります。

令和８年度　学長奨励賞

所属／氏名／職名	沿岸環境科学研究センター　田上 瑠美　准教授
研究分野	環境科学・環境分析化学

現代社会で使用される化学物質の種類は急速に増加している一方、その全てについて野生生物への曝露や生態影響が評価されているわけではない。特に、従来の環境モニタリングは既知の規制化学物質を対象としたターゲット分析が中心であり、未規制化学物質や環境中で生成する分解・代謝産物を対象とした調査は少ない。この問題意識から、私は、医薬品成分、農薬成分、プラスチック・ゴム添加剤、ペルフルオロアルキル化合物及びポリフルオロアルキル化合物（PFAS）等の多様な生物活性化学物質を対象として、高感度 LC-MS/MS および高分解能 LC-QTOF-MS/MS を用いたターゲット・ノンターゲット分析により、環境水や野生生物に残留する化学物質を網羅的に探索している。さらに、野生生物モニタリング調査、*in vivo* 生物濃縮試験、*in vitro* 肝代謝試験、*in vivo* 生態毒性試験等を組み合わせ、環境水中の化学物質濃度という外部曝露から、生物体内への取込、組織分布、代謝・排泄によって決まる内部曝露、さらに生態影響に至るまでの一連の過程を解明している。

これまでに、下水処理システムが十分発達していない南・東南アジア諸国の都市河川における医薬品類、農薬、PFAS 等の高濃度汚染を明らかにするとともに、低親油性のイオン性化学物質の中にも高い生物濃縮性を示す物質が存在することを明らかにした。さらに、その生物濃縮性には顕著な生物種間差があり、生物種特異的な生体内タンパク質との結合特性や代謝・排泄などの体内動態が、その差を規定する重要な要因であることを明らかにした。これは、化学物質の生物濃縮性を理解する上で、従来重視されてきた脂質への親和性（親油性）だけでなく、生体内での分子間相互作用や体内動態を考慮する必要性を示すものである。

近年は、新興汚染物質や環境変化体を対象としたノンターゲット分析へ研究を発展させ、従来のターゲット分析では見落とされてきた未規制化学物質および環境変化体を探索するとともに、その環境動態・残留性、生物濃縮性、体内動態、生態影響の解明に取り組んでいる。さらに、得られた知見を環境負荷低減へつなげるため、廃棄バイオマス由来バイオチャーによる吸着除去や、高度酸化処理（AOP）を用いた人工化学物質の分解除去技術の開発にも展開している。

本研究の特徴は、「探索・発見 → 環境動態・生物濃縮・体内動態 → 生態影響 → リスク評価 → リスク低減」を一連の研究体系として構築している点にある。これにより、従来把握されていなかった未規制化学物質の中から、優先的に詳細な環境リスク評価・監視を行うべき物質を選定するとともに、環境負荷低減対策を優先的に講じるべき物質を明らかにするための科学的根拠を提供することができる。化学物質の発見から生態リスクの評価、さらには環境負荷低減までを一体的に推進する研究プロジェクトが、JST 創発研究支援事業（FOREST）に採択された。また、これまでに発表した複数の研究論文や学会発表等の研究成果が評価され、日本環境化学会環境化学進歩賞、日本水環境学会中国・四国支部研究奨励賞等を受賞している。さらに、東南アジア諸国との国際共同研究を積極的に展開し、各国の化学物質汚染の実態解明と環境リスク評価に取り組むとともに、化学物質管理の高度化、衛生的な水環境の確保、生物多様性の保全に貢献することを目指している。

令和８年度　学長奨励賞

所属／氏名／職名	法文学部　藤村 瞳　准教授
研究分野	ビルマ（ミャンマー）史、東南アジア地域研究

受賞者は、国内外の研究者との共同研究・学術交流を通じてビルマ研究の国際的ネットワークの多角化に継続的に取り組んできた。とりわけ、欧米研究者に偏重しがちな研究コミュニティの在り方を是正するために、ミャンマー、日本、北米など多様な地域に拠点をもつ研究者が対等に議論できる場の形成を目指した学術交流活動に特色がある。主な業績は、以下の三点に整理できる。

一点目は、国内外における学術交流プラットフォームの形成・運営である。2023 年８月、国際共同学術プロジェクトの一環として、カナダ・ヨーク大学においてミャンマー・日本・北米の研究者による国際ワークショップを企画・運営した。同ワークショップは、カナダ政府機関 The Social Sciences and Humanities Research Council の国際学術交流助成を受けて実施され、日本人研究者６名、北米研究者４名、ミャンマー人研究者２名が報告し、討論にもトロント在住のミャンマー人研究者が加わった。また、2025 年５月には、幹事としてビルマ研究会年次大会を本学で開催した。同研究会 35 年の歴史で初の四国開催であり、日本国内の研究者に加え、ミャンマー、アメリカ、カナダに出自をもつ若手研究者も参加し、日本語・英語・ミャンマー語による活発な議論が行われた。

二点目に、海外学術誌における特集号の企画・編集を主導した。上記ワークショップの成果として、受賞者は海外学術誌 *Journal of Burma Studies* における特集号“Histories of Belonging and Identities (Re)Imagined”を企画し、共同編集者として執筆・編集作業に携わった。同特集号序論では、欧米偏重のビルマ研究の単純な批判に留まらず、欧米・ミャンマー・アジア各地域の研究者が関与する包括的な学術コミュニティの形成を目指す展望を示した。また、同誌としては初めてミャンマー語版を同時刊行した。英語版・ミャンマー語版のオープンアクセス化は、内戦化するミャンマー国内の研究者や若者に対し学術的議論へのアクセスを開く重要な試みである。さらに受賞者は、同特集号に単著論文“Intoxicated Men and Moral Women: How the Multireligious Moral Movements Crafted Gender in Colonial Burma”を発表し、英領ビルマにおける禁酒・道徳運動を題材に、複数の宗教を横断する倫理言説とジェンダー観の形成過程を論じた。

三点目として、査読付き海外学術誌の国際顧問メンバーへの選出が挙げられる。上記の学術活動と研究成果が評価され、2025 年９月より *Journal of Burma Studies* の国際顧問メンバーを務めている。同誌はビルマ／ミャンマー研究に特化した査読付き国際学術誌であり、世界各地のビルマ研究を代表する研究者が顧問リストに名を連ねている。日本の学界を代表して同リストに含まれているのは受賞者のみであり、研究対象国であるミャンマーを除くアジアに基盤を置く研究者としても唯一の選出である。

以上の業績は、受賞者が自身の研究を深化させるのみならず、ビルマ研究における国際的・多言語的・包摂的な学術コミュニティの形成に貢献してきたことを示すものである。